

## おうちでも旅気分を味わいたい！



うたがわよし  
歌川芳幾画

### 「東海道五十三次滑稽双六」

(草津市蔵)

とうかいどうごじゅうさんつき ことけいすごらく

(部分)

“やじきた”で知られる、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』をモチーフにした双六です。縦約50cm×横約72cm、木版多色摺で製作されています。手がけた絵師・歌川芳幾（落合芳幾）は歌川国芳の門人で、幕末・明治期に活躍しました。

このような、旅をモチーフとする双六は「道中双六」と呼ばれ、実際に旅をしている気分が味わえる仕掛けがされています。例えばこの双六は日本橋をふりだし、京を上がりに、途中の五十三の宿場をマスとしており、「箱根に振り当てれば手形を忘れ日本橋へ帰る也」、つまり「箱根」のマスに止まったら、「手形（身元証明書）を忘れた」という設定でふりだしに戻るルールになっています。

江戸時代、箱根には関所が置かれ、一般の旅人が通る際には関所手形・往来手形が必要でした。関所破りは重罪とされており、無事に通過できた多くの旅人が「山祝い」と称して酒を飲んだりしていることから、関所を越える緊張感をうかがい知ることができます。その認識が双六

にも盛り込まれているのでしょう。

またこの双六は『膝栗毛』のストーリーをなぞって江戸から京へ向かう設定になっていますが、同じ東海道の双六でも、上方の版元から出されたものの多くは京を出発する道順をたどっています。これも、遊ぶ人にとってよりリアルな旅のルートであるためと思われます。

江戸時代には、治安の安定、統一貨幣の流通、そして出版文化の隆盛などを背景に、レジャーとしての旅が庶民の間にも広まりました。『膝栗毛』などの書籍や、歌川広重「東海道五十三次」などの浮世絵は、木版摺で大量に作られ、比較的安価で流通したため、多くの人が遠くの土地のことを知れるようになったのです。とは言え、当時の旅はまだ危険と隣り合わせであり、気軽なものではありませんでした。今の私たちがインターネットや雑誌を見て「旅行に行きたい！」と思うのと同じような気持ちを、江戸時代の人たちも書物や絵画を通じて感じていたのかもしれない。

(令和2年8月・草津宿街道交流館学芸員 富田由布子)